

壺 阪 寺

4月～8月
行事予定

- 4月
4月18日(金)観音ご縁日
住職法話会、本尊法楽
- 5月
5月18日(日)観音ご縁日(眼病封じ祈願会)
住職法話会、眼病封じ祈願会、眼病封じ特別柴燈護摩
- 8月
ライトアップ夜間拝観(8月中の各土・日曜日、18:00～21:00)
8月18日(月)観音ご縁日(大施餓鬼会)
住職法話会、大施餓鬼法要

※6月と7月には観音ご縁日は開催されません。

つぼさか壺心会会員制度

つぼさか壺心会とは

つぼさか壺心会は、壺阪寺が行う福祉事業を応援する会です。

壺阪寺は、昭和30年代から国内では盲人の方に対して、国外ではハンセン病患者に対してご奉仕を行ってきました。今では、国内は社会福祉法人壺阪寺聚徳会として、国外ではアジア・アフリカ国際奉仕財団として活動を続けさせていただいております。

これらの福祉事業を多くの方々を知っていただき、また支えていただくために「つぼさか壺心会」は設立されました。現在は、当会報や壺阪寺境内においての広報活動、会員の方々へ事業の報告を行ったり、みなさまからのあたたかいご支援を国内外の福祉事業の充実に使わせていただく際の「橋わたし」の役割をしています。

一般財団法人
アジア・アフリカ
国際奉仕財団
(AIV)

社会福祉法人
壺阪寺聚徳会

つぼさか壺心会
初年度 5,000 円 (入会金 1,000 円含む)
継続 4,000 円
●会員特典●

会報送付(年4回) 壺阪寺入山料無料(1名様)
各種催しのご案内

■賛助会員1,000円
■会員特典:会報送付(年1回/1月号)

編集後記

遠く離れたインドの地(時差でいうと、マイナス3時間30分)を今は近く感じます。これは日本に住む者とインドに住む者とは、互いに必要とし感謝しているからではないでしょうか。互いに必要とすることで、気持ちの距離感がグッと縮まりますし、互いに感謝することで別れはさみしく、また逢う日を楽しみに待つことなのでしょう。

今号の編集にあたり、壺阪寺とインド、福祉のつながりを伝えさせて頂き、今後もそれぞれが発展し続けることをお祈りし、編集担当のご挨拶とさせていただきます。(鳥越)

つぼさか壺心会 92号



日本とインドの子どもたちによる「わらべうた交流」の様子(ロバ・ムドラ学校にて)

施設だより

第1回 美声コンテスト イン 慈母園



壺阪寺聚徳会傘下の施設をご利用されている方々の多くは、視覚や聴覚に障害を持つ方や知的障害を持つ方です。全国盲老人福祉施設連絡協議会(全盲老連)理事長の本間昭雄先生は職種別の研修会でも職員の声の張りについてお話しされ、視覚障害者にとっての声の大事さを説かれておられます。先生の印象深いお言葉に「声の表情を大切に」があります。日常私たち職員もご利用者の人たちの誘導や声かけで苦労しております。その原因の一つに、職員の発声方法の悪さや伝わりにくい声かけが挙げられます。

そこで、職員の日頃の声かけやご利用者を導く美声を修練し、障害を持つ方にもできるだけわかりやすい発声を身につけ、施設の日常の安全確保に一翼を担うことを目的に、本コンテストを開催しました。

開催当日(昨年12月10日)は、壺阪寺聚徳会の5施設から2名ずつ選ばれた計10名が慈母園に集まりました。声かけの内容としては、各自の自己紹介に続いて、「今日は寒いですね。毛布を持ってきましょうか」といった日頃のご利用者とのコミュニケーションを題材としました。審査員は施設のご利用者4名とご住職で、参加者のわかりやすい話し方や発声の明朗さに対して挙手をしていただき、その合計数で順位(番付)を決めました。その結果、横綱2名、大関4名、関脇3名、小結1名が決定しました。

声かけの重要性は皆が共有するところです。本コンテストをきっかけに職員の聞き取りやすい声かけへの意識を高めてまいりたいと思います。



A I V だより

ロパ・ムドラ学校校舎
修繕事業完了間近！

昨年7月から本格的な修繕工事が始まり、前号(91号)では経過報告をさせていただきました。その後、着々と工事は進められ、昨年12月末の段階では電気設備工事を残すのみで、教室の床や壁、校舎の屋上と外壁の修繕はすべて完了していました。

2月に学校を訪れた際には、すでに椅子や机が運び込まれ、授業が再開されていました。以前よりも照明が明るくなり、教室には写真のように折り紙で飾り付けがなされ、生まれ変わった教室に生徒たちも喜んでくれています。残りの修繕箇所は学校の門だけとなりました。次号では本事業の完了報告ができるかと思えます。



修繕の済んだ教室で学ぶ子どもたち



修繕を行った校舎(外壁はクリーム色に塗られています)

奈良まつぼっくり&ロパ・ムドラ学校わらべうた交流



「なべなべ」を楽しむ日本とインドの子どもたち

平成25年12月27日に奈良県を中心に活動している「まつぼっくり少年少女合唱団」(荒井敦子先生主宰)とその団員の高校生3名がロパ・ムドラ学校を訪問しました。合唱団は奈良県の古くから伝わるわらべうたを採譜(楽譜に書き取る)し、それらの歌の保存と歌の素晴らしさを伝える活動をされています。主宰者の荒井敦子先生は社会福祉法人壺阪寺聚徳会の理事を務めて頂いており、壺阪寺とご縁の深い方です。

昨年2月には、ロパ・ムドラ学校に単独で訪問して頂き、インドの子どもたちの遊び歌(わらべうた)を収集、採譜されました。採譜された歌は昨年11月に壺阪寺で開催された天竺音楽祭で披露して頂きました。

インドと日本の子どもの中で伝習される歌、わらべ歌には多くの共通点があります。日本の「ハンカチ落とし」や「だるまさんが転んだ」のような遊びがありました。

わらべうたや子どもの遊びにこれだけ共通点がありながら、今まで日本の文化の側面を見せずに続けてきたロパ・ムドラ学校との交流に、私たちが反省しなければならないところは多々あるように思いました。

そこで、日本の子どもたちに現地を訪問して子ども同士の交流を図ることにより、ロパ・ムドラ学校にも大きな魅力が加わるきっかけになるのではないかと思います。まつぼっくり少年少女合唱団の荒井先生と団員代

表の高校生3名に訪問して頂きました。今まで何度か日本の子どもたちに来て欲しいという要望が学校からありましたが、協力して頂く団体等に会うご縁に恵まれませんでした。今回のまつぼっくり少年少女合唱団の方々のご協力に感謝します。

訪問当日は冬休みでしたが、5・6年生の90名が集まってくれました。荒井先生が前回訪問した時に教えた日本の歌「なべなべ」はほとんど全員の子が歌ってくれ、合唱団の代表の3名も一緒にインドのわらべうたを歌い、遊び、あっという間の2時間でした。途中、荒井先生が主宰する「まほろば合唱団」のお年寄りの方々やまつぼっくり少年少女合唱団の保護者や関係する多くの方々で作ったクジャクの折り紙やお手玉が配られ、クジャクの折り紙の羽が広がると子どもたちから大きな歓声が上がりました。最後は、まつぼっくり少年少女合唱団の歌をご披露して頂き、自然に起こる手拍子に子どもたち同士の交流に何か生まれたように思います。

このわらべうた交流の名称を「奈良まつぼっくり&ロパ・ムドラ学校わらべうた交流」と名付け、今後も引き続き行っていきたいと考えております。

※動画投稿サイトYou Tubeにて当日の様子を掲載しております。検索欄に「奈良 わらべうた」と入力していただくと「奈良まつぼっくり&ロパ・ムドラ学校わらべうた交流」という一連の動画の検索結果が表示されますので、どうぞご覧ください。

A I V だより

まつぼっくり少年少女合唱団団員の
高校生3名がインド体験記を届けてくれました。

ロパ・ムドラ学校における「奈良まつぼっくり&ロパ・ムドラ学校わらべうた交流」を終えた、まつぼっくり少年少女合唱団の団員3名がそれぞれの体験記をまとめてくれましたので、ご紹介させていただきます。



ロパ・ムドラ学校の先生方と記念撮影

私は、12月25日から29日まで壺阪寺さんのご支援で、インドのアグラにある、ロパ・ムドラ学校の子供達との文化交流に行かせていただきました。出発前にご住職から「まつぼっくりの代表でもあるけれど、日本の代表でもあるよ。」とお言葉をいただき、そんな大役を与えていただいたのだと自覚しました。

3日目の朝にロパ学校へ行きました。私達が着いた時、何人か庭で遊んでいた、「ナマステ」とあいさつすると「ナマステ」とニコニコして返してくれました。冬休み中なのに約90人の子供達が集まってくれました。ロパの子達は、誰かが話を始めるとピタッと静かにして話を聞いているのを見て、日本とはずい分違うなと感じました。

まず、初めに、私達が大切に歌っている「奈良の大仏さん」を聞いてもらい、「なべなべ」というわらべうたは子供達と一緒に遊びました。みんな目をキラキラさせていました。

次に、私達が荒井先生に教えていただいたインドのわらべうたで、一緒に遊びました。子供達もよく知っている遊びだったので、とても盛り上がり、楽しい時間を過ごしました。「一緒に遊びたい人！」と呼びかけると、ピンと手

を伸ばして、真っ直ぐにこちらに目を向ける姿を見て、みんな積極的だなと驚きました。遊んでいる時に、私の名札を見て「あかりー」と呼んで抱きついてくれる子がいて、嬉しくて心が温くなりました。

「この子供達はどれだけ賢い子でも、親の理解がなければ学校には行けず、いつ学校をやめる時が来るかわからない。」と聞きました。私は、そんな事を考えなくても学校に行けるのは、どんなに幸せなことか気づくことができました。当たり前だと思っている幸せを大切に、過ごしていきたいです。



■木村 朱里さん

デリー空港の外に出て、私が最初に思ったのは「空気が砂っぽい」ということでした。日本では大気汚染で遠くがかすむということはなく、初めての体験でした。少し周りを見渡すと、インド人が私達をじっと見ていたり、野良犬が走っていたり、黒い肌の人ばかりでとても緊張しました。ホテルに向かう途中も私達の車よりはるかに大きなトラックが割り込んできて車内をのぞいてきたり、クラクションが鳴りっぱなしでものすごく怖かったです。

「日本に帰りたい！」そんな気持ちをガラリと変えてくれたのはロパ小学校のみんなでした。「なべなべ」というわらべうたで手をつないでくれた女の子は私の手をぎゅっとにぎってくれました。すると、緊張がふっと抜けて優しい気持ちになれました。言葉が通じなくても生徒や先生と歌でつながることができて本当に嬉しかったです。私達が日本で練習した、インドのわらべうたを歌うと、みんな大盛り上がりでした。このキラキラ輝く笑顔も、住職さんに教わった「人口の1%しか裕福に生きられない社会」にいるんだと思うと、「ずっとあの笑顔でいてほしいけど、そうもいかないのかな」と悲しくなりました。大型スーパーから一歩出るとお金を求めて集まってくる子どもやお年寄り、道で動かなくなっている野良犬。

私は、国際交流を今まで何回かしたことがありました。でも、自ら行くのは初めてでした。会うまでは、一緒に遊んでくれるか、プレゼントをあげても喜んでくれるか不安と緊張感でいっぱいでした。そんな気持ちの中で交流をし始めると今まで自分が心配していたことも忘れるほどでした。一番驚いたことは積極性です。みんなが誰よりも高く手を挙げていました。普段の自分では考えられませんでした。手を挙げることは人と浮くことで恥ずかしいことだと思っていました。しかし、それは全く違うんだという事に気付きました。

また、笑顔がとても素敵でした。誰一人、作り笑顔をしていなくて、あの笑顔は人生初めて見ました。その後に住職さんの話を聞いてなぜあんな素敵な笑顔だったかわかった気がしました。それは、日頃苦労をしたり、幸せがいつまでも続かないと分かっているから楽しい時は、何十倍にもなって本当の意味で今を楽しんでいるんだなと感じました。嬉しかったことは、名前を呼んでくれたことです。首から掛けていた名札を見て、一生懸命読んでくれました。また、最後にコンサートの終わりのように一人一人と握手をして「ダンニャワード。」と言って送り出すとみんな笑顔で帰ってくれました。いつものように当たり

衝撃の光景を何度も目にしました。でも、命あるものは全て神だと考え、自分が食べる前に野良犬に分ける。そのおかげで犬は生きていけるんだよ、とガイドさんが教えてくれました。将来の夢はアニマルレスキュー、という私はその考え方にとっても感動しました。インドに行って、日本は平和だということ、平和だからこそ守られているもの、気付いていないことがたくさんあると感じました。

今、日本に帰ってきてインドが恋しいし、これからもインドの考え方を尊敬していきたいです。ロパの子供達のように自分を強く持ち、今を一生懸命生きて、この体験を伝えていきたいです。



■鈴木 泰葉さん

前だと思っていた事だけど喜んでもらえて本当に良かったです。そして、一番嬉しかった事は、先生達から子供達で作ってくれた物をもらったことでした。全部手作りという事で今までで最高のプレゼントでした。

交流が終わり、住職さんが「子供達は今日の事は一生忘れないだろう。」とおっしゃいました。私はその場所に居れて本当に幸せ者です。色々なことを学ばせていただきました。今回の事は一生忘れません。学んだことをこれからの人生に生かし、歩んでいきたいと思えます。今回インドに行くことができ、本当に良かったです。ありがとうございました。



■駒谷 帆波さん

A I V だより

座談会／壺阪寺聚徳会職員インド研修

10年以上の永年勤続職員を中心に、選抜された施設職員が常盤ご住職に同行させて頂く形で、インドのカルカラとアグラへ研修に行かせて頂きました。研修の目的としては、「壺阪寺とインド、福祉の関係性、およびその歴史と現状について学ぶ」という主旨のもと、3施設から5名が参加させて頂きました。普段は、別々の施設で働いている職員が、法人の原点ともいえるインドへ巡拝させて頂き、目で見て、肌で感じ、心に残ったことを確認し、意見交換の場として座談会を開催させて頂きました(この研修旅行の内容については別添の行程表をご参照ください)。

上岡—インドを訪れてみて率直な感想をお聞かせください。

江本—旅行前は日本に比べると町が汚い、水が悪い等マイナスイメージが多かったのですが、実際に訪れてみて、みんな精一杯生きてる感じを受けました。この姿を見て、自分が忘れていた一面ではないかと思ひ、日常的に自分自身に「これでいいの」「他の方法はないか」という問いかけが大切だと感じています。ただ、どうしても車間距離の短さや車の割り込みは最後まで怖かったです。

明田—17年前の訪問時と比べてインドがどれだけ発展しているかはよくわからなかったのですが、車の量がすごく増えていますね。道路を横断するとき、人々の間に暗黙の了解のようなものがあって、横断歩道がなくてもスルスルと渡っている姿が印象的でした。その光景に触れ、人間としてのたくましさやインドの人に感じました。

辻本—今まで訪れた国とは違い、空港のセキュリティーの多さに驚きました。すごく緊張感がありました。

岩井—私はアグラにあるロバ学校の雰囲気の良いなと思います。例えば、日本の学校に外国人がグループでやってくると物珍しい目で見られるようなことがあると思いますが、私たちがロバ学校を訪れたときに、雰囲気が一気に変わり、我々日本人をすぐに受け入れてくれる良さを感じました。

鳥越—この巡拝の旅の話が出たときに、誰よりも最初に手を挙げて是非行きたいと思いました。インドと壺阪寺と福祉とのつながりを知りたかったのです。個人的にはインドの人が、気分屋で好奇心旺盛なところに戸惑う場面が多々ありました。

◎参加者
鳥越 信孝(光明園 副施設長)
明田 三千代(慈母園 主任生活相談員)
江本 好隆(明日香園 支援員)
辻本 優(明日香園 支援員)
岩井 優子(慈母園 支援員)



◎司会：上岡 学正(法人本部職員)

上岡—カルカラを訪問されていかがでしたか。

明田—慈母園ご利用者の「観音様の御膝元で暮らしたい」という思いをかみしめながら、カルカラの地を訪れました。大観音石像建立の地へ赴き、石を切り出したところに触れ、先代の御骨が眠っている菩提樹の木の前に立ち、「ここから始まったんだ」と実感しました。また岩山の上に登って眺めた森と岩山が広がる風景が目に焼き付いています。

辻本—大観音石像やほかの石仏がつけられた場所に行けて感動しました。当法人に採用されてから、いつかはインドに行ってみたくてという思いをずっと抱いていました。カルカラの工場で「TSUBOSAKA」と書かれた看板を見てインドでの壺阪寺の存在の大きさに感激しました。

岩井—菩提樹が大きく育っているのを見て、みんなを見守ってくださっているのだなと思いました。

鳥越—(ビデオ撮影を担当していたので)岩山にビデオカメラを持って上がった時に、画面がザーンと波打っていたのがすごく印象に残っています。この場所は神聖で力強いパワーがあると確信しました。



5 勝憲和尚の遺骨を納めた菩提樹



大観音石像石切場



座談会の様子

江本—第一に日本から遠く離れたこの地で現地の人々の生活に密接に壺阪寺が関わっていることが不思議、そして信じられない気持ちでいっぱいになりました。立派な建物が揃っていると感じました。

上岡—インドを訪問されて、壺阪寺と福祉とインドとのつながりをどのように感じられましたか？

明田—何年か前に壺阪寺の境内で福祉布巾の勧進をしていたときを思い出し、参拝者のありがたい、あたたかい気持ちで施設が成り立っているんだなと感じました。また、このインド研修で、人に優しくなれたように感じています。何に対しても優しくするというわけではなく、一人一人を改めて尊重できるようになったように思います。

辻本—あんなに離れたインドと当法人の各施設がつながっていることに感動しました。明日香園の成り立ちについて、壺阪寺のインドでの評価、特にハンセン病患者の救済事業のおかげで奈良県から都祁園の移管が決まったことを思い返していました。

岩井—当法人の理念である「思いやりの心を広く深く」の広くについては、わけへだてなく人にご奉仕するというので、深くについては、カルカラの岩山を訪れて改めて大観音石像建立の規模の大きさを知りました。



鳥越—お寺とインドと福祉の結びつきを尋ねられることがあります。今までは自分が知り得た情報だけでお答えしていましたが、今回初めてインドを訪れ、インドの雰囲気を肌で感じ、お寺と関わり深い土地を訪れることができました。次からは自信を持って、そういったご質問に答えることができるようになると思っています。

江本—お寺、福祉、インドはバラバラな要素と置いていました。お寺と福祉が結びつくところは他にもあるでしょうが、そこにインドが関係するには資金面でリスクがあると感じていました。しかし、そこにはご住職のお話によって理解できたお互いに必要であった歴史がありました。それぞれの要素が互いに必要とされ、結びついていたのです。私たちはその重要な歴史を周りの職員に伝え、皆が誇りをもって働けるようにしていくことが使命と感じています。

上岡—今後に生かしたいことや職場で伝えたいことなどがあればお聞かせください。

明田—60歳を迎える節目の年に貴重な機会を頂いてインドに行かせてもらったというご縁と、自分の中での大きな区切りというご縁を頂きました。ご住職が話しておられた「福祉の仕事は大変だけど、もう一歩踏み出してほしい」という言葉を聞いて、もう少しがんばりたいなという思いです。

辻本—ロバ学校への訪問がもっとも印象的です。初めてインドに赴き不安だらけでしたが、子どもたちと接して、子どもたちから安心感を与えてもらいました。学生時代に教育実習で経験した子どもたちの笑顔とインドの子どもたちの笑顔は、なにも変わらず嬉しかったです。

岩井—慈母園のご利用者の話をよく聴いていきたいです。きっとどなたもお若い時は人一倍一生懸命に生活しておられたのだらうなとインドの方々を見て感じました。想像しにくい部分を上手に伝えることが大事であると思っています。

江本—法人の理念の原点を実感しました。施設職員全員がインドに行くことができれば一番いいのかもしれませんが、自分の感じたことや見聞きしたことを全員に伝えていきたいです。

鳥越—私には子供が3人いるので、自然と子どもたちが目に留まりました。路上で風船を売っている子どもを見て、自分の子どもと重ねてしまいました。インドでは、家族が生きる為に！これがすべてであり、その為には大人も子どもも関係ない！その姿は胸を打ちました。

